

実践総合農学会 ニュースレター

Society of Practical Integrated Agricultural sciences NEWSLETTER

第26号

2024年1月16日発行



兒ら佑くファームを語る主の背に 甲斐駒ヶ岳 雲湧き出る

目次

農福連携のフロンティアを開く素晴らしいシンポジウム 実践総合農学会会長	門間 敏幸 … 4
拡大を続ける“農”の役割と well becoming 株式会社夢育て代表取締役 NPO 法人ユメソダテ理事長	前川 哲弥 … 7
第 16 回実践総合農学会地方大会（北社市）に参加して 東京情報大学総合情報学部総合情報学科教授	朴 鍾杰 … 8
実践総合農学会第 16 回地方大会に参加して 栃木県立那須拓陽高等学校教諭	齋藤 恵美 … 9
実践総合農学会第 16 回地方大会（北社市）に参加して 山梨県立農林高等学校教諭	渡邊 一葉 … 10
個別研究発表を通して見つけた新たな発見 東京農業大学食料環境経済学科 環境経済研究室	吉田 雅子 … 11
実践総合農学会第 16 回大会参加感想 東京農業大学大学院 地域環境科学研究科農業工学専攻	秋山 大知 … 12
シンポジウム「総合農学からみる農福連携の展開と社会実装」に参加して オーガニックライフハケ岳株式会社取締役	大塚 広夫 … 13
編集後記 2023 年実践総合農学会秋季（地方）大会を終えて 実践総合農学会事務局長	堀田 和彦 … 14
新会員のご紹介	… 15

2023年度実践総合農学会秋季大会 個別研究発表プログラム

シンポジウム「総合農学からみる農福連携の展開と社会実装」

日程：2023年11月11日（土）・12日（日）

開催地：山梨県北杜市

会場：ハーベストテラス八ヶ岳 <http://harvest-t.jp/>

参加費：一般無料・入退場自由



11月11日（土）14:30～17:10

シンポジウム

座長 町田怜子・佐々木昭博（東京農業大学）

報告1：行政現場からみる農福連携

（山梨県農政部 原田達）

報告2：農業現場からみる農福連携

（株式会社ファーマン 井上能孝）

報告3：福祉現場からみる農福連携

（NPO 法人八峰会 サービスセンター八峰 田中恵子）

報告4：農福連携と、障害者の生涯教育

（NPO 法人ユメソダテ 夢育て農園 前川哲弥）

報告5：スマート農業からみる農福連携技術

（東京情報大学 朴鍾杰）

パネルディスカッション

*17:30～19:00 登壇者および参加者の交流を目的として懇親会を開催します。

懇親会費 4,000円

11月12日（日）9:00～13:30

学会員による個別研究発表

高校生の発表（栃木県立那須拓陽高等学校、山梨県立農林高等学校）

講評、総括、閉会

主催：実践総合農学会

後援：東京農業大学

協力：公益財団法人全国学校農場協会

▼ホームページQRコード▼



問い合わせ先 実践総合農学会事務局 spia@nodai-rs.net

会員は学会ホームページの会員向け開催案内をご確認ください。

農福連携のフロンティアを開く素晴らしいシンポジウム

実践総合農学会 会長 門間 敏幸



新型コロナウイルスの蔓延により、中止を余儀なくされていた地方大会が3年ぶりに山梨県北杜市で開催されました。実学を追求する実践総合農学会にとりまして、地方大会は様々な問題を抱えながら営農ならびに農業支援活動を展開されている地域の人々の活動状況や生の声を知り、新たな研究課題の発掘と研究成果の普及を行う重要なフィールドです。

今回の開催地であります山梨県北杜市は東京から電車や車で2時間圏に位置し、南アルプス、八ヶ岳連峰に囲まれた風光明媚で、東京からの移住者も多く居住する人気の町です。今回この北杜市でシンポジウムを開催するにあたり、とりわけ北杜市で多様な取り組みが行われている農福連携をとりあげることにしました。

我々農業関係者はとすると、労働力不足が著しい農業における補助労働力として障害者労働を捉えがちです。しかし、農業分野からだけでなく、福祉施設サイド、さらには障害者サイド、さらには地域の多様な発展といった多角的な視点から農福連携を捉える必要があると考えます。そうした意味で北杜市ならびに山梨県は農福連携に先駆的に取り組んでいる地域であり、様々な農業経営体、福祉施設が多様な取り組みを展開しています。

今回の地方大会は従来の地方大会と異なり、大きな会場で教室スタイルでシンポジウムを開催するのではなく、講演者と参加者の距離がなく、気軽に意見交換できるスタイルでの開催を目指しました。そのため、東京農業大学の造園学科出身で自らも博士（造園学）の学位を取得後に北杜市で新規就農して活躍している大塚広夫さんの全面的な協力をいただきました。大塚さんはオーガニックライフ八ヶ岳株式会社を起業して農業さらには農福連携を実践するとともに、自分の農場で採れた新鮮な野菜やハーブを利用した料理を提供する「ハーベストテラス八ヶ岳」という地産地消レストランを開業しています。学会開催にあたりこのレストランを提供していただき、シンポジウムと個別報告、高校生の活動報告を行うことができました。心から感謝申し上げます。

この新たな開催スタイルは、結果的に大成功でした。学会のシンポジウムという堅苦しい形式や雰囲気にも陥ることなく、講演者の方々も普段通りの自分のスタイルで話をし、質問者の方々も聞きたいことをストレートに質問できるという雰囲気の中で、議論を深めることができました。今後の実践総合農学会のシンポジウムの開催方法を再検討する非常に重要な地方大会となりました。

なお、個別報告、高校生の報告につきましては、既に[学会 HP](#)に私が紹介していますので、ここでは、シンポジウムの内容につきまして要点を紹介させていただきます。講演内容の詳細

細につきましては、[講演資料の PDF](#) を学会 HP からダウンロードできますのでご利用ください。

シンポジウムは町田玲子東京農大教授と本会副会長の佐々木昭博さんの司会進行の下、5 課題の事例報告と、パネルディスカッションが行われました。

第1 報告「行政現場からみる農福連携」(山梨県農政部 原田 達さん)では、山梨県における農福連携の取り組みが体系的に紹介されました。特に取り組みの推進エンジンとなったのは平成 30 年に設置された「山梨県農福連携推進センター」であり、農福連携に関するマッチング事業、新規参入・立ち上げ支援事業、農福マルシェの開催、支援者向け講習会の開催、6 次産業化アドバイザーの派遣、販売事業支援など様々な支援体制を整備して活動を展開しています。特に最近では農福連携で生み出された商品のブランド価値の向上の取り組みに力を入れたユニークな活動を展開しています。第2 報告「農業現場からみる農福連携」(株式会社ファーマン 井上能孝さん)では、新規就農の経緯から 2012 年にスタートし現在 4 社の福祉法人と連携した取り組みを展開している農福連携の活動が紹介されました。「農×福」の取り組みの基本にある考え方は、「障害者と農業が連携」することによるシナジーの発揮においており、屋外・屋内・施設内の作業、出荷・調整作業などで連携できる福祉施設や、障害者の特性に合わせた作業が行われています。こうした農福連携の取り組みの積み重ねから、「成果報酬の採用」「時間をかければ必要な人材になれる」という確信を得、農業(農家)も福祉(障害者)も自立できるという確信を得て取り組みをさらに発展させています。

第3 報告「福祉現場からみる農福連携」(山梨県北杜市 NPO 法人八峰会 サービスセンター 八峰多機能型事業所 精神保健福祉士・職業指導員 田中恵子さん)では、オーガニックライフハケ岳株式会社代表の大塚氏との出会いから 2017 年に始まった農福連携の取り組みが紹介されました。その中で、作業労賃アップの効果、農福連携における福祉施設の職員の役割、具体的な作業の内容が紹介されました。その中で、障害者は作業内容を毎回リセットしてしまうので毎回説明することの大切さ、特定作業に集中させることの重要性、個々に障害の内容が異なる作業への声掛け、フォローの重要性が指摘され、福祉施設職員の役割の重要性を再認識させられました。第4 報告「農福連携と、障害者の生涯教育」(NPO 法人ユメソダテ 夢育て農園 前川哲也さん)では、知的障害者の就労や夢を育てることに重点をおいた福祉事業の取り組みの重要性が紹介されるとともに、“人を育てる畑を創りたい”という目的の基に模索されている「新しいコミュニティ農園」構想が紹介されました。具体的には、「人を育てる畑」の青年コースのカリキュラム案(2024 開講予定)とその効果を把握するための評価方法、東京農大とのコラボの重要性と利点などが紹介されました。前川さんの報告では、「夢育て農園」の意義、実践効果の検証方法について、きわめて科学的な提案がなされており、教育機関との連携による今後の実践が期待される取り組みといえるでしょう。実践総合農学会としても支援していきたい実践活動であります。第5 報告「スマート農業からみる農福連携技術」(東京情報大学 朴鍾杰さん)は、高解像衛星データの農業分野における活用実態を紹介するとともに、AI 技術を用いた視覚障害者支援システムの開発の現状、AI

を活用したストレスや病気の検知システムの研究が紹介され、将来的に農福連携の取り組みに応用可能であることが説明されました。

総合討議では、ファーマン代表の井上さんに対して、現在の経営の内容、作業や個人の能力に応じた労賃支給や個性を發揮した仕事の実態、経済合理性追求の重要性に関する質問が集中しました。NPO 法人八峰会の田中さんに対しては、作業者と支援者との関係、特に作業サポートの内容と留意点、障害者の特技や特性を活かすことの重要性などについて論議が行われました。夢育て農園の前川さんに対しては、新しいステージ（利害の一致段階→Well being→well becoming）に入った農福連携における教育機関の mission の重要性が議論されました。

なお、シンポジウム終了後の交流会には多くの参加者が大塚さんのレストランで調理された地元食材を活用した素晴らしい料理と会員から提供された山梨ワインとのコラボで、シンポジウムで話し足りなかった農福連携の話題に花が咲きました。

最後に実践総合農学会の地方大会の今後の方向性を考えさせられた意義ある大会であったことを申し添えておきます。



写真1 障害者が作業する大塚さんのいちごハウス



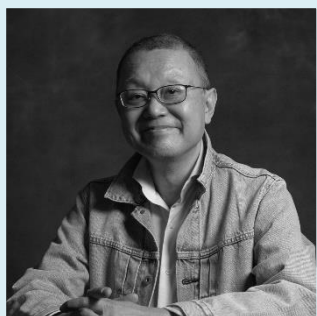
写真2 南アルプスをバックに



写真3 シンポジウム会場の様子

拡大を続ける“農”の役割と well becoming

株式会社夢育て代表取締役 NPO法人ユメソダテ理事長 前川 哲弥



地域創生学科町田教授のお声がけで、実践総合農学会第16回地方大会@北杜市に参加させて頂きました。「総合農学からみる農福連携の展開と社会実装」というとても魅力的なテーマのシンポジウムで、「農福連携と障がい者の生涯教育」について話題提供をさせて頂きました。シンポジウムの冒頭、矢嶋副学長が、異分野も含めて集まることで細分化された学問の視野を広げる場であるとされ、門間学会長が、社会実装を目指して社会の

様々な方々と知見を共有するプラットフォームと定義されました。今回のシンポジウム&学会は、現場の農家や福祉事業所の方、行政の方、情報科学からの貢献、高校生や現役農大生など、多様で刺激的な経験・知見が集められ、学会の理念を体現した素晴らしい場でした。

“農”の担う役割は、年々広がっています。2千年前後、多面的機能とその評価方法の議論が盛り上がった時のように、今、農福連携が農業の役割を拡げつつあります。この運動は、農福 x X という形で福祉の範囲も超えた拡がりを見せています。

思えば近世の農業農村は、社会的弱者の多くを当たり前の構成員として包摂していました。戦中戦後の障害者施設の多くは、農山村に立地し、農業を営んでいました。しかし、高度経済成長からバブルの崩壊に至るまでの間、都市化による農村人口の流出と相まって進んだ農業の近代化は、一部を除き、彼らの居場所を狭めてきました。そして近年の情報化社会の進展は、知的発達障害者の社会参加をより困難にしてきた経緯があります。

そのような中で、2010年前後、人手の足りない農家と、仕事の足りない福祉事業所の利害の一致を基盤とした新たな“農福連携”が全国で始まり、今も拡大し続けています。優良とされる取組みでは、農と弱者の絆が深まり、互いの well being を思いやる豊かな関係が生まれ、新しいユニヴァーサルな地域を創成しつつあります。

私たち夢育ては、世田谷区内で農作業と認知発達促進法を組み合わせ、知的・発達障害者の認知的成長を促しています。心理テストを通じて認知的成長を確認したのは本邦初ですが、計測されていなかっただけで成長事例は沢山あったものと思います。これは、具体性が高く＝抽象性が低く、作業のバリエーションが豊富な“農の力の再発見”でもあります。そして私たちは、畑で人が成長することを通じて、well being を超えて、日々より良く生きる well becoming な関係を構築し、社会に“希望”を発信したいと考えています。

社会の現場と出会い協働することで、実学たる農学が、その本来の姿に立ち返る機会を提供するのが本学会の役割であるとすれば、これほどふさわしい場はないと考え、この度学会員とならせて頂きました。これを契機に、学会の先輩の皆さまと交わらせて頂くことができれば、この上ない幸せです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

第 16 回 実践総合農学会地方大会（北社市）に参加して

東京情報大学総合情報学部総合情報学科 教授 朴 鍾杰



第 16 回実践総合農学会地方大会（北社市）へのご招待、誠にありがとうございました。私は東京情報大学の朴鍾杰と申します。私の専門は衛星画像データやドローン観測データを用いた植物の健康状態の調査などのデジタル画像が主であります。最近では AI を活用して野菜の生育ステージを判別したり、人の行動を認識する研究を進めています。今回の「総合農学からみる農福関連の展開と社会実装」に関するテーマは、私のこれまでの研究とは異なり、新鮮で刺激的なものでした。

私が農福を知ったきっかけは、2020 年の東京農業大学×東京情報大学の共同研究プロジェクトで町田怜子教授と池内風香さんと出会ったことです。池内さんは全盲でありながらも、農業に取り組む姿を見て、何か手助けできることはないかと考え、農福に対する興味を抱くようになりました。また、今回の発表にあった NPO 法人ユメソダテ農園の前川哲弥さんと NPO 法人八峰会の田中恵子さんの活動報告を聞いて、是非情報技術と AI を使った支援ができるのではないかと思います。学会から戻り、ゼミ生に農福活動について話すと、学生たちも一緒に参加したいとの意見があり、来年の夏休期間中に八峰会を訪問し、情報技術（ICT, IoT, AI）でサポートできないかを調査する予定です。

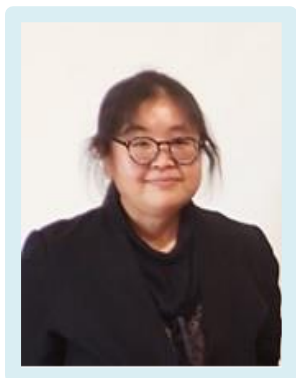
学会の運営において、私が最も感銘を受けたのは、高校生たちのプレゼンテーションでした。高校生が多く専門家の前で自分たちが行った研究を堂々と発表する姿勢は、まさに未来の研究者のようでした。彼らは研究の喜びを理解しており、その研究から実践への志を追求していることが何よりも印象的でした。例えば、自分たちでワインを作りながらも試飲できない 17 歳の高校生が、ぶどうからワインを生産し、しっかりとしたブランド「17ans : デイセダン」を構築し、販路を拡大している活動や、地元の豆を保存するプロジェクト（拓陽 SoyPro）を進めながらの苦労話には、心から感動しました。私が所属している学会でも、このような活動を積極的に導入したいと心から感じました。

ハーベストテラス八ヶ岳を運営している大塚広夫さんは、持続可能な地域農業を目指して北社農業体験会や障がい者雇用を積極的に進めている、優れた志を持つ方でした。彼は農業活動のみならず、経営までのサイクルを重視し、その循環を進めなければ地域が豊かにならないという信念を持っていました。また、得た利益を社会に還元する姿勢は、他の模範的な取り組みとして感銘を受けました。

今回の学会参加から得たものは、単に知識だけでなく、心に響く有益な話や実体験でした。再度、ご招待いただき、心より感謝申し上げます。

実践総合農学会第 16 回地方大会に参加して

栃木県立那須拓陽高等学校 教諭 齋藤 恵美



令和 5 年 11 月 12 日（日）に、山梨県北杜市で開催された令和 5 年度実践総合農学会第 16 回地方大会の高校生による活動報告部門へ参加させていただきました。

今回のシンポジウムテーマは「総合農学からみる農福連携の展開と社会実装」でした。本校は SoyPro 同好会という部活動における活動を発表させていただきました。SoyPro 同好会では、本校 OB である有機農家さんから在来大豆 2 品種を譲り受け、6 年前に栽培を開始。また、つくば市にある農業生物資源ジーンバンクから提供いただいた栃木県の在来品種などを、無農薬・無化学肥料により栽培をしています。

○発表内容

拓陽高校 5 学科の枠を越え、農業系 3 学科・普通科・食物文化科の生徒が集まり、それぞれの学ぶ事を活かしながら、和食に欠かせない原料となるが、自給率が著しく低いなど、大豆のおかれた状況を改善するために地域へと活動の場を拓けています。【栽培分野】では収量や品質を上げるため、BLOF 理論を学びながら実践しました。また、作業の効率化を図る為に工業高校に粗選作業の機械化をお願いしました。【加工分野】では栃木県内の食品加工業者を中心に協力いただき、豆腐や納豆、味噌、醤油を生産しました。【販売分野】では地域のマルシェに工業高校や特別支援学校の生徒と共に出店し自分たちの製品を販売しました。【学習・交流分野】拓陽高校生徒・職員全員で大豆を育てる「おうちでたねまき」を実施し、大豆の現状を周知し育てる楽しさを共有できました。また、特別支援の生徒とも大豆栽培を実施し、栽培した大豆は納豆にして食べてもらいました。



○大会に参加して

山梨県で行われた実践総合農学会の発表会に招待いただき、同好会の普段の活動や他校との連携事業について、学会の皆様の前で発表できた事は生徒たちにとって良い経験になりました。自分たちの発表に対し、多くの質問を頂けた事は興味を持って聞いてもらえた証明であり、短い時間でしたが発表できて良かったと話しておりました。生徒たちの自信に繋がる貴重な機会を頂きまして本当にありがとうございました。



実践総合農学会第 16 回地方大会（北杜市）に参加して

山梨県立農林高等学校 教諭 渡邊一葉



この度は 2023 年度実践総合農学会第 16 回地方大会（北杜市）において、貴重な発表の場をいただき、誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。ワイン県山梨の発展ため、地域に根差したワインプロジェクトを進めてきた本校の活動内容が実践総合農学会のねらいとする「様々な立場から農を通じ、ともに歩む豊かな地域づくり」と合致し、高く評価いただいたことをとても嬉しく感じております。

当日は緊張した面持ちで発表を開始した生徒ですが、みなさまの興味を帯びる微笑や驚嘆に満ちたどよめきをいただき、拙い発表を見守る温かい雰囲気のもと、無事に発表を終えることができました。そこには喜びと自信に満ちた表情を垣間見ることができたように思います。

本校では 2020 年に果実酒試験製造免許を取得し、「山梨ワイン発展のための協働と若手技術者の育成～ワイン醸造学習を中心としたワイン県やまなしの地域資源活用、地域活性化、新たな価値を創造する職業人材の育成を目指して～」をテーマに、専門的な取り組みを行っています。その取り組みは食品系、園芸系、環境系学科を含む本校全 5 学科で横断的に連携し、新たな教育実践を実現しています。具体的にはワイン製造実習、県内ワイナリーでの最新技術見学、ワインツーリズムなどの観光業に関する講演会、CO₂ゼロエミッション、気象データの取得と IoT 化、スマート農業の実践などに取り組み、敷地内には醸造用ブドウの圃場を備え、ブドウ栽培からワイン製造、そして販売・流通の一連の工程を体系的に学べる教育課程を展開しています。

発表後の質疑応答で「ワイン製造に IT やスマート農業を取り入れるとすれば、どのようなことが考えられるか」という質問をいただきました。本校では先述したように気象データの取得やワインの発酵タンクに温度センサーを設置し、発酵管理を行っていますが、その時ふと「その先」を強く意識しました。「その先」とは IT やスマート農業で得た数値データの扱い方です。学会会長の門間氏が HP で大学生の個別研究報告に対し、数値データについて様々な分析手法を用いて数的評価がなされていることを高く評価されていました。実際に大学生の発表や講評を拝聴するなかで、私もデータサイエンス分野の重要性を強く感じました。本校では IT やスマート農業を取り入れ始めた段階であり、今後は収集したデータをどのように分析して、その後の研究に活かして行くかが課題であると考えています。

収集した数値データはワインの品質向上はもちろん、生徒たちの活動内容に説得力を持たせるものとなります。そのデータから有用な結論や知見を導き出すことができるよう今後の学びを深化させて行きたいと思っております。

個別研究発表を通して見つけた新たな発見

東京農業大学食料環境経済学科 環境経済研究室 吉田雅子



令和5年度の実践総合農学会北杜大会に参加し、様々な分野において専門の先生方からのコメントや他学科の方の研究内容を知ることができる貴重な機会を頂き、誠にありがとうございます。

発表した内容と発表までに取り組んだこと、また会全体を通しての感想について述べます。

まず私たちの研究内容は沖縄県の離島である渡嘉敷島の環境協力税を事例として、入島税の支払意志額を推定しました。背景には豊かな自然や食など魅力的な資源が多い離島に観光客が増加し、環境整備の費用が増大している傾向があります。渡嘉敷島では1人1回の入域毎に100円を徴収し、環境保全などに役立っていますが、十分ではありません。そこで、観光客に対して、環境協力税の使途を拡大させた場合の平均支払意志額の推定を行いました。この結果から、税の徴収方法など検討する必要がある事が分かりました。

研究活動においては先生の的確な指導のもと、文献資料調査では研究室員が期待以上の情報や意見を出してくれたため、順調に進めることができました。今回発表をすることができたのも先生や仲間のおかげだと実感しています。

個別発表会全体を通して考えたことや新たな発見としては、2点あります。1点目は会長の門間先生から「データをしっかり分析することがアンケートに答えてくれた相手への感謝になる」というコメントが印象に残り、今後の研究に活かしていきたいと思いました。学会での報告後、改めて回答の集計データを1つ1つ見ると年代や居住地、何人で渡嘉敷島に来たかなどの回答結果から頭の中で回答者の人物像が浮かび上がる初めての感覚を得ました。渡嘉敷島から居住地が遠いほど支払意志額が上がるかなど新たに分析したいことも見付き、研究活動の奥深さを垣間見たとともに、より多くのことを知りたいと思いました。

2点目は他の個別研究発表に関することです。まず昆虫食のためのコオロギ生産用の飼料に関する研究発表は、内容は難しいと思うのですが、多くの人に理解できるような話し方をされており、この点について見習いたいと感じました。また視覚障害者の農業体験プログラムについての発表はその方にしかできない研究であり、研究においては独自性も必要であることを再確認することができました。このように上記2つの研究は、経済学が主である私の研究領域とは異なりますが、世の中を良くするための研究を知ることのできた学びや視野を広げることができ、新たな発見になったと感じています。

最後に、個別研究発表の機会に参加させていただき、研究の改善点に気づき、自身の新たな学びとなりました。この場をお借りして感謝申し上げます。今後は後輩に今回得た経験を伝えながら論文投稿のためのサポートに尽力してまいります。

この度は本当にありがとうございました。

実践総合農学会第 16 会大会参加感想

東京農業大学大学院 地域環境科学研究科 農業工学専攻 秋山 大知



2023年11月11～12日に実践総合農学会第16回大会に参加をさせていただきました。私は両日参加をし、初日はシンポジウムの聴講をさせていただきました。自身の専門分野と異なる農業と福祉の連携に関するお話でしたが、利点や課題点などを聞くことがとても勉強になりました。特に、それぞれの性格に合わせて現場の方が声かけや作業を変えているというお話がとても参考となりました。今後、農業従事者が減少する中で昨今注目されているAIやIoT技術を活用したスマート農業だけでなく、福祉分野との連携に関する取り組みは重要になると感じました。二日目には個別研究報告と高校生の取り組みの発表を聴講させていただきました。まず、個別発表に関しては食品販売・流通における経済性・消費者心理など様々な観点からの解析や離島の入島税に対する支払い意思の推定、視覚障害を持っている方を対象にした農作業の可能性など様々な研究・アイデアを共有いただき、自分自身の世界が広がる非常に有意義な時間となりました。私自身も人口増加に伴い、食や飼料として再注目されているコオロギの大量生産に関する研究報告をさせていただきました。特に「飼料設計」と「コオロギの糞の肥料化」というテーマで二報報告をさせていただきました。飼料設計に関してはコオロギ飼料に昆虫を使用することの有用性を報告させていただきました。本研究の一部は海外論文で受理・公開されましたのでご興味がありましたらご覧いただけますと幸いです。” D. Akiyama, T. Kaewplik, and Y. Sasaki, Investigation of the usefulness of two-spotted cricket (*Gryllus bimaculatus*) feed using two-spotted cricket (*Gryllus bimaculatus*) powder to replace fishmeal, *Journal of Insects as Food and Feed*” 糞の肥料化に関しては、コオロギ生産の問題点の一つである生産時の熱源の有効活用の観点から作物とのハイブリット生産を念頭とし、ピーマンを対象に検討をしました。特に追肥での活用を目的としましたが現時点では有意な結果は得ることが出来ませんでした。一方でセンサを用いて温度湿度・土壌水分量・pH・ECなどの環境データを蓄積・解析をする体制を整えたため、現状判明していることも含めて引き続き研究を進めていこうと思います。最後に高校生の発表では、農業高校の学生によるワインと大豆に関する取り組みを聴講させていただきました。両校共に、非常に素晴らしい取り組みをされておりとても参考になりました。特に商品開発のラベルや名称、普及のやり方等高校生らしさを活用した取り組みに感銘を受けました。総括として、研究報告だけでなく様々な方の取り組みを知ることや交流をすることが出来たことが今回の学会に参加した意義につながると感じました。最後になりますが、学会事務局担当者様や先生方を始めとする多くの方々のご支援によりとても有意義な学会開催となりました。この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

シンポジウム「総合農学からみる農福連携の展開と社会実装」 に参加して

オーガニックライフ八ヶ岳株式会社 取締役 大塚広夫



この度はご縁をいただき実践総合農学会のシンポジウムと秋季大会を山梨県北杜市で開催していただきありがとうございました。北杜市は山梨県内では農業が最も盛んなエリアであり、水稲から高原野菜、醸造用葡萄などの栽培が盛んな地域です。近年では有機農業に取り組む新規生産者が増え注目されています。東京からの交通の便もよく、八ヶ岳や甲斐

駒ヶ岳に囲まれた山岳景観は都会からの移住者にも人気があります。初日のエクスカーションでは私が取り組んでいる農業事業を案内させて頂き、農場を歩きながら農福連携の取組みや地域連携の実践について農大の先生方や会員の皆様にお話しすることができ、多くの気づきをいただきました。今回のテーマである農福連携は農業事業を実践する中で私自身、非常に興味が湧いてきて地域の社会システムに欠かせない取組だと思っています。農業の現場には「労働力不足、高齢化」といった人材不足問題、福祉の現場には「より高賃金の仕事、外での農作業、やりがいのある仕事」を求める声があり、マッチングがうまくいけばWIN-WINの関係が構築できます。また多様な事業者との地域連携にも大きな貢献が可能となり、やりがいもあります。今回のシンポジウムでは農業現場の視察から、行政、農業者、福祉事業者、NPO 運営者、大学研究者がそれぞれの視点で農福連携への取組みを報告し、意見交換が行われました。農福連携というのは学問ではなく、社会の中で生まれた障害者が農業の現場に参画し活躍する必要不可欠な取組であり、今後も社会に広く根付いていてもらいたいと考えています。今回のタイトルにある「社会実装」を農の現場で再確認し、意見交換をできたことは私たち農業事業者や地域にとっても有意義なシンポジウムとなりました。一方、大学の研究者と地方の現場には距離があり実学主義を掲げる農大でも農業の現場は遠いのだと感じました。官民連携や産官学連携という言葉はよく聞くようになりましたが、さらに進んだ大学と地域農業の連携、新しい取組や情報発信ができると思います。今、地方の農業は課題が山積していますが、注目度も高く多くの企業が新規参入や連携を模索しています。地方創生の要は間違いなく「農業」であり、地方がより元気になるためには新しいことにチャレンジできる大学との連携も欠かせないと考えています。東京農業大学並びに実践総合農学会の皆様専門性、現場とのユニークな取組が今後の地方創生に成果を上げていくことを期待しています。

編集後記

2023 年実践総合農学会秋季（地方）大会を終えて

実践総合農学会事務局長 堀田 和彦



本号は 2023 年 11 月 11 日（土）、12 日（日）、3 年ぶりに山梨県北杜市・ハーベストテラス八ヶ岳で開催されました実践総合農学会・地方大会のシンポジウム、個別報告、高校生発表の御登壇者よりご寄稿頂いた原稿を掲載しております。ご執筆頂いた皆様、本当にありがとうございます。

今回のシンポジウムテーマ「総合農学からみる農福連携の展開と社会実装」の実行にあたりましては、町田玲子東京農大教授、会場を提供頂いた大塚広夫様にあらためて心より感謝申し上げます。参加された先生方の原稿にもあります通り、本当に素晴らしいシンポジウムが実施されたのではないかと感じております。距離の近い空間での農福連携を実践されている農業者、福祉関係者の生の声は、本当に刺激に満ちた内容であり、参加者からも多くの実りある意見や提言があったように思います。また、個別報告、高校生の発表も地域の資源を活用した大変興味深い内容の発表があり、大変勉強になりました。

今回の地方大会は実践総合農学会の今後の地方大会のやり方を考える上でも、非常に示唆に富む大会であったと思っております。農業・食料分野の実践的な現場の解、社会実装につながる議論を行うのが本学会の使命であるとするならば、これからも今回行われた地方大会を参考に地方大会やシンポジウムが実施されることを期待します。

表紙 実践総合農学会前会長 三輪 睿太郎



2023 年 11 月、山梨県北杜市における第 16 回地方大会のテーマ「農福連携」を農業経営の中で実践する岩窪農場を視察しました。

兒ら佑くファームを語る主の背に 甲斐駒ヶ岳 雲湧き出る
(こらたすくファームをかたるぬしのせに かいこまがたけ くもわきいづる)

